
メガネの魔法 1 ～始まりの公園～

シマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガネの魔法 1 ～始まりの公園～

【Nコード】

N5848P

【作者名】

シマ

【あらすじ】

彼氏いない歴〃自分の年齢。そんな恋に奥手の私。ロマンチックな出逢いに憧れるけど……メガネっ子にそんな出逢いがある訳もなく。気分転換に出掛けた公園で犬に飛び付かれて……

「ああ、こんなに良い天気なのに……虚しいな」

私、遠藤裕美（えんどうゆみ）は、二十歳にして、未だに彼氏がいない。初対面の男性と話するのが苦手で出逢いはなく。せつかくの休日も、友達とは彼とデートで遊んではくれない。気分転換に公園を散歩して、そのままベンチで本を読んでいたが……

回りはカップルや、家族連れがほとんどで、一人の自分はかなり浮いていた。

（明日は仕事だし、帰ってゆっくりお風呂に入ろう）

虚しいため息を吐きながら立ち上がりかけた時、犬の鳴き声がすぐ側で聞こえた。

「えっ？……うわ！！」

気付いた時には手遅れ。犬は私めがけて飛び付いた。中途半端な姿勢だった私は、見事に犬と一緒に地面にぶつかり、かけていたメガネが飛ばされた。

「なっ！何！？ワンちゃん、落ち着いて〜」

顔を舐められてベトベトの上に、地面に倒れたせいで腕と背中が痛かった。

「大丈夫ですか！？すいません、うちの犬が」

バキヤ

飼い主さんらしい人の声と、信じられない音が聞こえて血の気が引いた。

「あああ！！メガネ！私のメガネは！？」

「すいませ……ん。私が踏んでしまつて……」

犬を押さえながら言つた飼い主さんの一言に、私は目の前が真っ暗になつた気がした。

私の視力は、半端なく悪い。

乱視が強くて、お店にレンズの在庫はなく何時も取り寄せの特注品だ。

（嘘でしょう……予備はあるけど……どうやって家まで帰ろう）

メガネがなくては、真っ直ぐに歩く事すら出来ない。途方にくれて動かない私の腕を飼い主さんが引き上げて、立たせてくれた。

「メガネは弁償しますから、今からでも買いに行きましょう」

「ああ、いえ多分この近くじゃ売ってませんから良いです」

「売ってない？」

飼い主さんの怪訝な声に慌てて説明を付け加えた。

「私、極端に視力が悪くて、レンズは大概取り寄せなんです。家に予備がありますから気にしないで下さい」

「じゃあ今も見えてないの？」

笑って誤魔化しながら服に付いた土を払い落とすと、足元に座る犬の頭を撫でた。

「次は、飛び付いちゃダメよ。ね？ワンちゃん」

わん！

承諾の様な元気な鳴き声を聞いて、私は思わず声を上げて笑った。飼い主さんは、何故か黙ったままで、でも帰るには丁度いいかも。

「それじゃ、失礼します」

ぺこりと頭を下げて歩きだした私は、腕を捕まれ転びそうになった。振り向くと、飼い主さんが右手がしっかり握っている。

「あの……放して下さい」

「車で来ますから、せめて家まで送ります」

「車……いえ、泥だらけだし汚すといけなので止めておきます」

メガネのない私には飼い主さんの表情処か、ただののっぺらぼう。返事もなく困って首を傾げたら、飼い主さんが顔を近付けてきた。

「もしかして、私の顔が見えてないのか？」

「あの……」

先ほどより強くなる口調に身体が強ばる。誤魔化せないと諦めて、私は素直に頷いた。

「それなら、なおさら家まで送ります。ついてきて下さい」

飼い主さんは壊れたメガネを拾うと、私の腕を引き何処かへ歩き出した。景色も道の様子もボヤける私は、素直について行く以外出来なかった。

駐車場に着き乗るような言われた車は、黒い軽自動車。

小さなスポーツカータイプの車に、私は興味津々で見えていたら、後ろから笑い声が聞こえた。

「珍しいですか？」

「あついや……私、車が好きなんです。見てると興奮しちゃって……」

「へえ……来週からクラシックカーのイベントがあるの知ってますか？」

「そうなんですか！？どこで！」

興奮しすぎて大きな声になり、また笑われた私は肩を萎めて俯いた。

（また、やってしまった……あれ？でも、メガネがないせいかな？

初対面なのに緊張しないで話せる)

「お詫びも兼ねて、一緒に行きませんか？遠藤裕美さん」

「えっ？……名前？」

自己紹介などしていない。自分の名前を知る飼い主さんに、戸惑っている私の目の前に顔をつきだしてきた。

「この位置なら分かる？」

鼻先がつきそうな距離に現れたのは、会社の上司。

仕事が出来て、知的でクール。

会社の中で結婚したい相手No.1。

そんな人が目の前にいる事に、訳が分からなくなった私は、目を皿の様に丸くして見詰めた。

「山崎課長……？」

「相当、悪いんだね。今頃、気付くとは」

少し呆れた様な声とは裏腹に、目はとても楽しそう。嫌な予感がした私は、逃げようと思った瞬間、再び腕を捕まれた。

「逃がさないよ。まずは、君の家を教えてもらおうか？」

ニツコリと微笑む課長は、有無を言わせない迫力があり、私は首を縦に振ることしか出来なかった。

メガネと犬がくれた出逢いが、恋の幕開けになるのは

あと少し先のお話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5848p/>

メガネの魔法 1 ～ 始まりの公園 ～

2011年4月16日11時59分発行